

当報告の内容は著者の著作物です。

第5回基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」公開セミナー

「社会空間の人類学の可能性」

平成23年1月21日（金）15:00-18:30 AA研306号室

「人類学の静かな革命」

___ストラザーン、ラトゥール、ヴィヴェイロス・デ・カストロを中心に検討する___

春日直樹（一橋大学）

ストラザーン、ラトゥール、ヴィヴェイロス・デ・カストロらが中核となって推進してきた、現代人類学の「静かな革命」(Holbraad et als 2007:7)について検討する。この「革命」は、いわゆるポストモダン人類学が提起し残していった二つの課題を、特有のあり方で乗り越える。他者の表象化、およびこれを正当化する手段としての「リアリズム」という課題である。

ストラザーンは、人間とモノ、主体と客体、物質と精神といった従来の二分法を退けてしまい、これらを固定視して関係を検討するのではなく、反対にこれらを生成させ変換させる関係性について論じる。他方ラトゥールは、自然が普遍的であり科学によって解明されるべきという通念、社会や文化は記号やシンボルの世界として理解されるべきという通念、そして二つは別種の実践であるという通念をすべてしりぞける。彼に拠れば、法則も概念も信仰も、すべては人間やモノや人工物が混交的に関係しあう様式として成り立つにすぎない。

両者に関係するのは、人間と主体に対する徹底して関係論的な認識である。「徹底して」とは、人間以外のモノや人工物を同等な要素として組み入れる点で、さらに実在はこれらとの関係においてのみ成り立つと主張する点で、ゆえにリアリティとは関係の生成変化に等しいとする点において、ふさわしい言葉だからである。今日二人が揃って脚光を浴びだしたのは、この点がみいだされたことを意味しており、人間と現実に関する「存在論的転換」と形容されても不思議でない。

両者は「内在的」(immanent)なアプローチによって、他者の表象化もリアリズムも問題として成り立たなくしてしまう。ストラザーンの「メログラフィ」批判、ラトゥールの「(決してなっていない)近代」批判は、ともに差異を外部に想定する前提をしりぞける。二人はそれぞれに、差異が内部を起源として外へと広がる様子を描き、かつ実体でも非実体でもなく、現実を構築するプロセスかつモメントであることを明らかにする。他者を外部に想定したり、リアリティの有無を論じる必要がなくなるのだ。

ラトゥールの分析がとる徹底した「対称性」、そしてストラザーンの議論を支える「部分的接続」と「水平的反響」(lateral reflection)は、ともに定点の喪失と表現できる。これに比べると、ポストモダン人類学以降の人類学の大半は、自然と文化(社会)、人間と非人間、主体と客体の二分法を当然の前提として受け入れるかぎり、いまだに超越的な視点を前提にしたまま、みずからの領域を定義づけている。よって「存在論的転換」は、「超越から内在への転換」と言い換えることができる。

こうした内在的な論述は、新しい様式としての批判を形成する。どんなアクターにも均等な視点を付与することによって、何がアクターとして活性化し他のどのようなアクターとつながるのかが考察できるし、ちょっとした細部の変化があり得たかも知れないつながりや生成可能かもしれない現実を喚起する。この論述においては、法則や因果関係のような非対称的な関係が実体化されることはなく、その関係がどのように作りあげられるのかが対称的に追跡されていく。そして、細部はみずからを基準として内側から差異を生成し、その差異をもって外部の差異とつながり、外側に向けてあたらしい現実をつくりだしていく。この論述は、外部ないし上方に視点を定めて真相を一義的に同定して日常の実践や経験の虚偽性を暴くという従来の批判の対極において、あらためて展開されるべき批判のスタイルである。

「静かな革命」とは、細部に力を宿す人類学という学問の本領を、現実批判として発揮する運動だ、ということができよう。

- Henare,A.,M.Holbraad, and S.Wastell(eds)
2007 ‘Introduction.’ In Henare,A. et als(eds). *Thinking though Things: Theorising Artefacts Ethnographically*. London: Routledge.